

過疎山村における高齢者を支える「つながり」の維持と創出：浜松市佐久間町を事例として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学教育学部 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中條, 暁仁 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009190

過疎山村における高齢者を支える「つながり」の維持と創出

－浜松市佐久間町を事例として－

The Maintain and Creation of Social Relations of Elderly People in Depopulation
Mountaious Villages : The Case Study of Sakuma Town, Hamamatsu City

中 條 暁 仁
Akihito NAKAJO

（平成 26 年 10 月 2 日受理）

1. 問題の所在と本稿の目的

現代の過疎山村は、集落の限界化や平成の大合併¹⁾、経済のグローバル化などに起因する地域再編によってさまざまな地域問題が生じており、住民の多数を占める高齢者の生活に大きな影響を与えている。

過疎山村をめぐる地域問題は大きく4つに区分され（岡橋，2004），高齢者の生活との関連を付加すると、次のように整理できる。第1は「中心地域からの遠隔性」である。一般に過疎地域は大都市から遠隔にあり、都市に転出した子どもの多い高齢者にとって、空間的距離は老親子関係にさまざまな影響をもたらしている。第2は「人口の希薄さと小規模社会」で、過疎地域は人口密度が低く地域社会の規模も小さいため、医療や福祉を中心に施設立地は十分でなく、サービスの供給に課題を抱えている。また、公共交通の縮小や撤退が相次ぐなど、個人的移動手段を持たない高齢者の外出にも制約をもたらしている。第3は「経済的衰退と周辺化」で、外部依存型の経済が不安定化する中で、いわゆる「6次産業化」など新しい地域経済の担い手として高齢者に期待が寄せられている。第4は「生態系空間の不安定化」で、農林業の低迷に伴う農地や山林の荒廃が挙げられ、加齢に伴う規模の縮小はまぬがれないが、高齢者に管理主体の一翼としての役割が求められている。

過疎山村では、集落の限界化により村落社会が伝統的に有してきた地域的社会的関係の弱体化が懸念されている。さらに、合併から10年を経た今日において、広域合併とは対照的に、空間的に狭い範囲でのコミュニティの重要性が高まっている。地域住民の社会的関係を再編・再構築することによって、生活に必要な諸サービスの撤退や合併に伴う行政サービスのスリム化に対応する地域住民組織が生まれている。近年、こうした試みは「小さな自治」あるいは「小さな拠点」として政策的にも進められており（国土交通省，2012），社会経済や地域福祉を内発的に補完する取り組みといえる。

本稿は、地域的社会的関係の総体を「つながり」とよぶが、この社会的関係は高齢者の生活を支えるサポートの授受の基盤となるものである。高齢者にサポートを付与せずとも、サポート源になりうる地域的社会的関係の創出が高齢者の生活を支える上で求められているのである。後述するように、過疎山村では村落社会に根ざした「つながり」を維持することや、それに代わる

新たな「つながり」を創出することが課題になっている。特に、機能剥奪が進む被合併山村においては切実な問題になっているといえよう。

そこで本稿は、過疎山村のうち被合併山村における集落の実態をとらえたうえで、高齢者の生活を支える「つながり」を維持あるいは創出する取り組みとその意義を明らかにする。そして、その「つながり」の機能をあわせて検討する。

2. 浜松市佐久間町の地域概観

本稿は、「平成の大合併」により過疎山村を含む広域な中山間地域を編入し政令指定市となった浜松市に注目した。その中でも、被合併山村で高齢化が特に高く（2010年時点で49.7%）、地域住民が高齢化に対応した取り組みを展開する天竜区佐久間町（旧磐田郡佐久間町）を対象地域に取り上げた。

佐久間町（図1）は、浜松市中区などの中心市街地から北西へ直線距離で約50km、天竜区の中心集落である二俣からは約30kmの距離に位置する。天竜川の本流とその支流の大千瀬川と相川、水窪川の流域を占める山村で、北遠山地の西部に位置する。天竜川本流は蛇行しながら町内を北西から南東方向に流れ、支流の大千瀬川や相川はほぼ西から東へ、水窪川はほぼ北から南へ本流に流れ込んでいる。同町は赤石山脈に連なる山地から成立しており、山地高度は矢岳山（926m）や愛宕山（800m）などが最も高く、標高500～600mの山地が連なっている。山林面積が町域の90%を占め、30度を超える傾斜面で構成されている。この広い山地の中に、中央構造線などの断層帯や河川の浸食・堆積作用によって平地や緩斜面が形成され、集落が立地している。

佐久間町は、2007年に「平成の大合併」によって旧磐田郡4町村とともに浜松市に編入合併され、旧天竜市とともに浜松市天竜区を構成している。そもそも平成の大合併以前の旧佐久間町は佐久間ダムが完成する直前の1956年に旧浦川町、旧佐久間村、旧山香村、旧城西村の4町

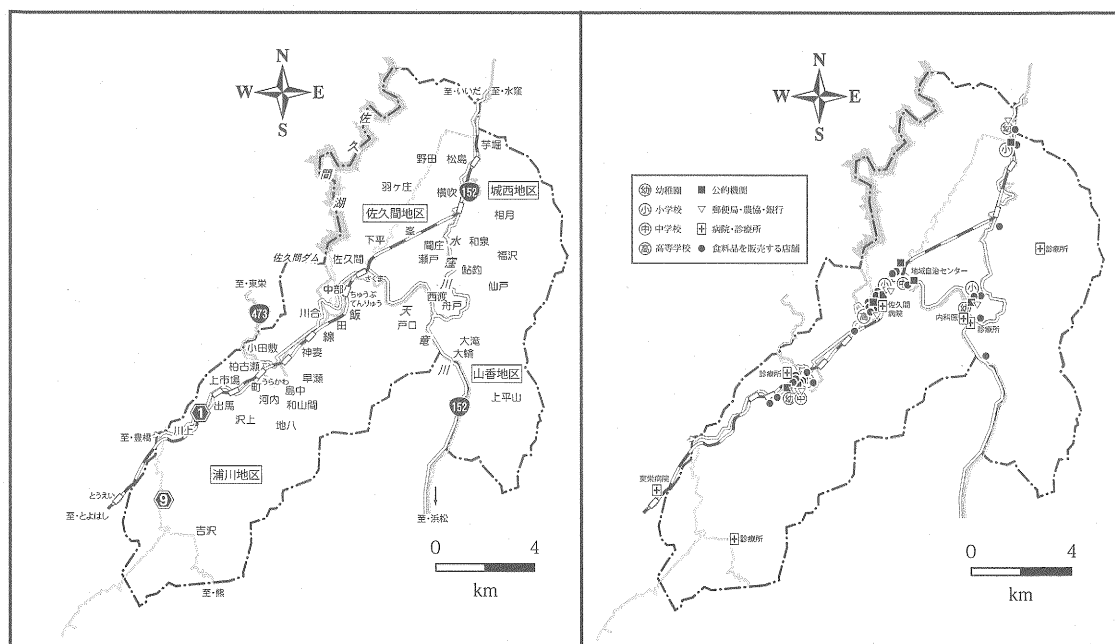


図1 浜松市佐久間町の概観

村が合併して成立した。この昭和の大合併には、ダムと発電所の建設により佐久間町に入る巨額の固定資産税収入が大きく影響したといわれている（町村編，2006）。

前述するように佐久間町と愛知県豊根村の境界には、1956年に完成した佐久間ダムが立地している。このダムは政府出資で設立された電源開発会社が1953年に最初に着工したダムであった。佐久間発電所の最大出力は35万キロワットで、堰堤の高さは155.5m、堰堤長293.5mに及ぶもので当時の最新土木技術を導入して建設された。

3. 集落の小規模・高齢化と「限界化」

ここでは、佐久間町における各集落の立地特性と人口面に注目して、その変動を検討する。特に、集落人口に占める65歳以上人口の割合を示す高齢化率や構成世帯数、人口増減率、1世帯当たり人員の変動を分析する。

佐久間町に分布する諸集落は、天竜川とその支流沿いの谷底平野に多く立地している。支流の大千瀬川には浦川地区の中心集落である柏古瀬や町、本流沿いには佐久間地区の中心集落である中部や佐久間、山香地区のそれにあたる大滝や大輪、城西地区は水窪川沿いに芋堀が立地する。しかし、全般的に河川は峡谷状をなし、平地に乏しいことから高位緩斜面上にも集落が点在する。これら標高の高位集落の大部分は水窪川流域にみられ、佐久間地区の羽ヶ庄550mを最高に、峯の400m、山香地区の野田460mと続く。高位集落の多くは、南向き緩斜面の山腹地すべり性斜面に立地しているのが特徴である。

次に、高齢化率の実態を確認する（図2）。佐久間町には37集落が存在するが、このうち高齢化率が50%を超えるのは浦川地区で13集落中9集落、佐久間地区で8集落中5集落、山香地区で11集落中8集落、城西地区で5集落中1集落ある。最も高いのは和山間の100%であり、

次いで地八の80.0%、神妻76.2%と続く。こうした高齢化率の高い集落は、従来は中心性の低い縁辺集落に分布する傾向にあったが、現在では幹線道路沿いの集落においても多くみられるのが特徴である。高齢化が全域に進んでいることを示している。

集落を構成する世帯数について、1960年と2010年の数値を比較しながら検討する。それによると、すべての集落において世帯数が減少し、山香地区と城西地区で顕著である。中には3分の1あるいは4分の1にまで減少している集落も多く存在する。しかし、高齢化が顕著に進みながらも世帯数の減少が僅かに抑えられている集落も存在する。例えば、沢上集落は68.4%と極めて高い高齢化率でありながら、世帯数は16から14に減少するのみであり、

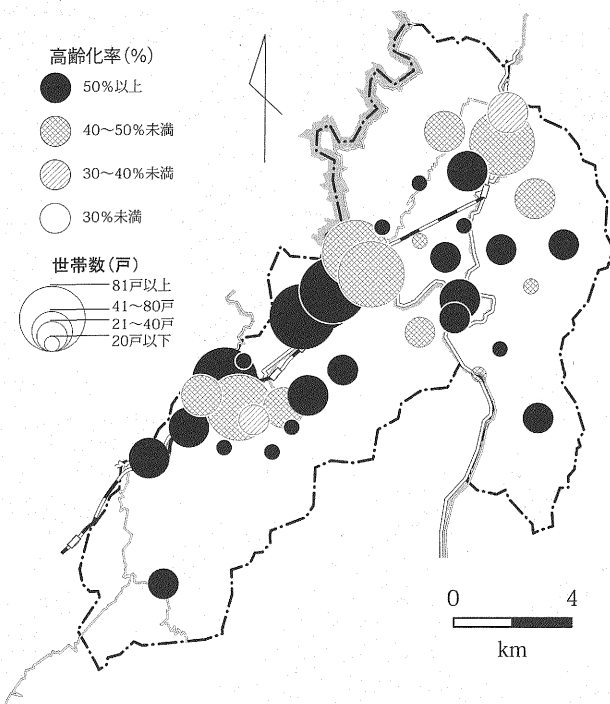


図2 浜北市佐久間町における集落の高齢化率と構成世帯数
資料：浜北市住民基本台帳を基に作成

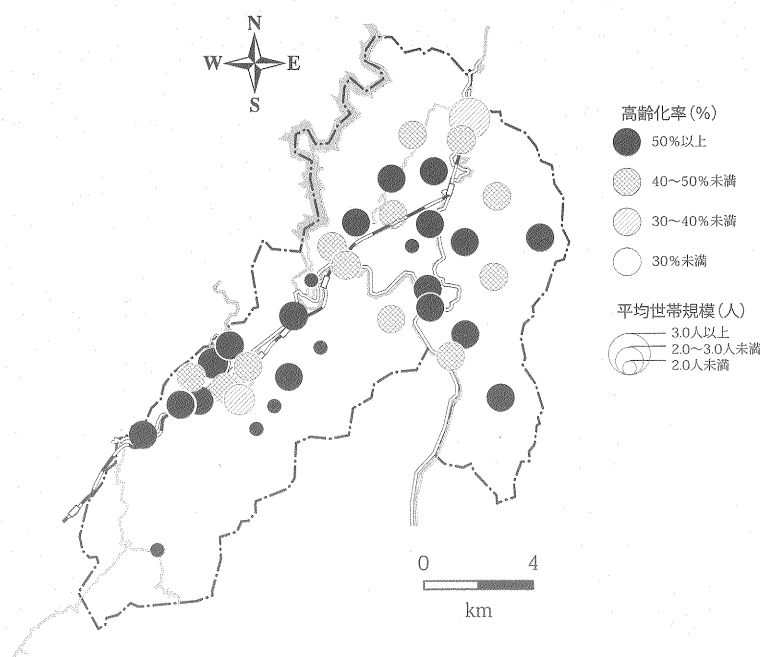


図3 浜松市佐久間町における集落の平均世帯規模と高齢化率
資料：浜松市住民基本台帳を基に作成

小田敷集落では50.0%であるが10世帯しか減少していない。いずれも縁辺に位置する小規模集落であるが、住民が高齢化しながらも生活を維持している実態が窺える。各集落において高齢者のみの世帯が総世帯数に占める割合をみると、20%台が2集落、30%台が9集落、40%台が10集落、50%台が10集落、60%台が5集落、70%台が1集落、100%が1集落である。縁辺集落のみならず、中心集落における高齢者世帯の増加が顕著になっていることも特筆される。

続いて、高齢化率と1世帯あたりの平均世帯人員との関

係を検討する（図3）。平均世帯人員をみると、大部分の集落で2.0～3.0人未満に該当している。高齢化率も40%を超えている集落が多いことから、高齢夫婦世帯か高齢単身世帯が多くなっていることが推測される。また、縁辺集落には2.0人未満で高齢化率の高い集落がみられるなど、世帯の小規模と高齢化が顕著に進んでいることがわかる。世帯人員の縮小は、高齢者の生活に不可欠な世帯内でのサポート源の減少を意味しており、言い換えれば世帯内でのサポートの授受が行われにくくなっていることを意味している。

最後に、各集落の人口増減率を1960～2010年における50年間のデータから確認する。これによると、すべての集落で50%以上の人口減少がみられ、縁辺集落では70%以上が減少している。いくつかの集落では、90%以上に達している。こうした集落に対しては「限界集落」として問題視される傾向にあるが²⁾、50年を経た今日においても集落が存続しているという事実に着目すべきであろう。

4. 高齢者をめぐる地域的社会的関係とサポートの授受

(1) サポートの機能と特性

ここでは、本稿で地域的社会的関係を重視する根拠を提示する。筆者は、高齢者が自立した生活を維持する要素として、高齢者とサポート源が構築する社会的関係を基盤に授受されるサポートを指摘した（中條，2007）。

具体的には、「手段的サポート」と「情緒的サポート」がある。前者は日常生活における手伝いやお使い、風邪で寝込んでしまったときの一時的な看病など高齢者に対する物理的なサポートであり、後者は話し相手や相談相手になるなど精神的なサポートである。前者は高齢者との対面接触を必要とするため、高齢者とサポート源との空間的距離がサポートの授受に影響を及ぼす。一方、後者は電話やメール、手紙などの通信手段によっても対応が可能であるため、

対面接触を必ずしも必要としない。さらに、高齢者の生きがいや居住継続の志向に関わるものであり、高齢者の生活にとって重要な要素となっている。しかし、両者を比較すると、日常生活の遂行に直接かわると考えられるのは「手段的サポート」である。

(2) 集落の限界化とサポートネットワークの空洞化

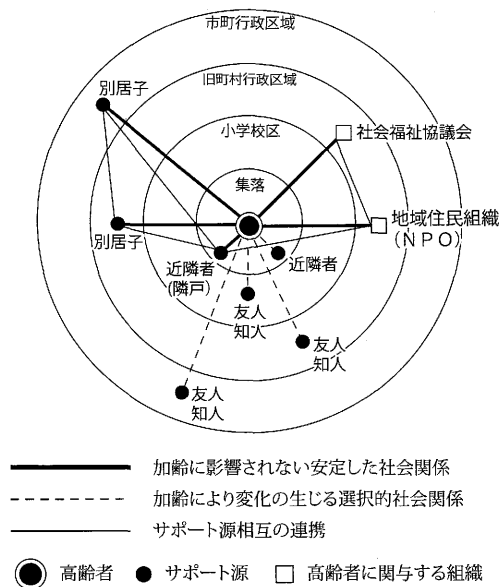


図4 過疎山村におけるインフォーマルなサポート源のネットワーク

資料：中條（2003, p.994）を一部改変

図4は、農山村におけるインフォーマルなサポート源のネットワークを、各サポート源の空間的位置と加齢に伴うサポートの授受の変化に則して示した模式図である（中條, 2003）。高齢者からの空間的距離が遠いサポート源ほど社会関係の構築が加齢によって希薄化し、サポートの授受が行われにくくなる。過疎地域では子どもと別居する高齢者が多いが、老親子関係は加齢に関わらず維持されるのでサポートは授受される。ただし、老親子関係の空間的距離によってサポートの授受にかかる頻度や質が左右される。一方、高齢者が居住する近隣圏域に存在する近隣者は、加齢に関わらず強い紐帯で結ばれやすい。近隣者の中でも高齢者宅から可視範囲にある隣戸は、高齢者の日常生活を見守る機能を担い、最も安定したサポート源としてサポートネットワークの要と位置づけられる。

しかしながら、過疎地域で進む集落の限界化はサポートネットワークに空洞化をもたらしている。

高齢者世帯の増加とそれに伴う社会関係の希薄化は、近隣におけるサポートの授受を停滞させる。世帯規模の縮小とも相まって、自己の世帯内でのサポートの授受が困難な高齢者世帯に、他の世帯をサポートするだけの余裕があるとは考えにくい。高齢者だけで対応が難しくなれば、その解決のために別居子や近隣といったインフォーマルなサポート源、あるいはフォーマルなサポート源を頼りにせざるを得なくなる。しかし、別居子のサポートは空間的要因から限界が伴うことに加え、フォーマルなサポート源も前述のように需要密度の小ささや社会保障費の削減により十分なサポートを供給できず、それへの依存は困難である。

このようなサポート源の空洞化を補完する新たなサポート源として注目されるのが、住民参加の地域福祉活動である。この住民参加の地域福祉活動組織の特徴は、サポートの授受が近隣関係ではなく空間的に広い活動範囲を有した社会福祉協議会や住民組織によって制度化され、必ずしも相手を居住集落の住民に特定しない点にある。これにより高齢者に近接するサポート源が増加し、集落におけるサポートネットワークの空洞化を補完することが期待されるのである。

本稿で取り上げる「つながり」は、サポートを授受する基盤となる地域的社会関係のことであり、サポート源を創出する地域的基盤と言い換えることができる。高齢者にサポートを授受

せずとも、サポート源になりうる地域的社会的関係の維持や創出が過疎山村の生活問題に対応するために求められているのである。

5. 高齢者と地域住民による「つながり」の維持と創出

(1) 佐久間町における小地域福祉活動の取り組み

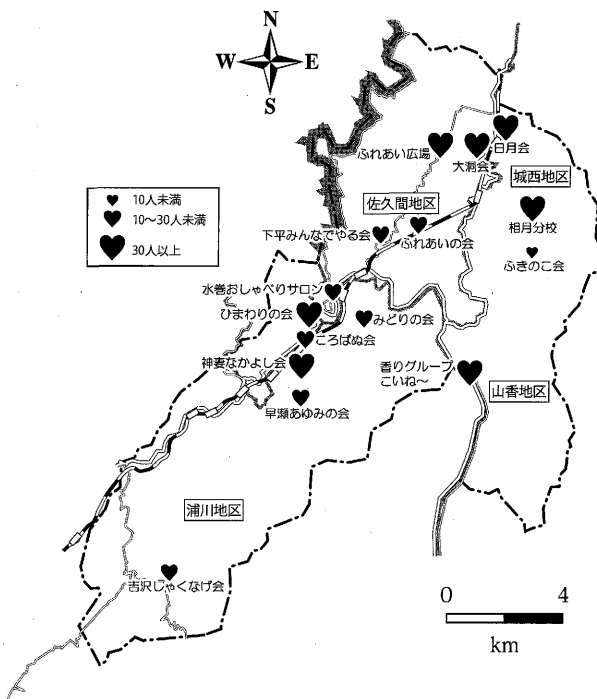


図5 佐久間町における小地域福祉活動の分布
資料：佐久間地区社会福祉協議会資料

ここでは、高齢者と地域住民による「つながり」の維持や創出の実態を明らかにする。

佐久間町では、高齢者相互の地域的社会的関係を維持・創出するために、佐久間地区社会福祉協議会の働きかけによって小地域福祉活動が実践されている。これは通称「サロン活動」ともよばれ、高齢者と支援者が1つの場所に寄り集まることで、自己の社会的関係を補完したり、新たに作り出すことなどを目指している。

町内には15サロンが分布し、空間単位別にみると集落が12、それよりも大きな地区は1、複数の集落が共同で1つのサロンを運営する形態が1つみられる。図5のように、構成人員は数十人～600人を超えるものまで多様である。高齢化率の高い集落で多く形成されているのが特徴といえよう。開催頻度は、年に数回から月に数回まで幅がある。活動内容は、

構成員が相互に雑談したり、社会福祉協議会が開講する研修を実施するなど、高齢者が相互に意思疎通を図ることができる活動となっている。

(2) 「吉沢しゃくなげ会」にみる「つながり」とその機能

(i) 集落構成世帯と既存の「つながり」の実態

ここでは、佐久間町吉沢集落で活動する「吉沢しゃくなげ会」を取り上げ、集落における既存のつながりや新たに創出されるつながり、およびそれらの機能の実態を提示する。

まず、同会が存在する吉沢集落における既存のつながりの実態をみておく。同集落は佐久間町浦川地区にあり、地区中心のJR飯田線・浦川駅から約8kmの距離にある縁辺集落である。吉沢集落は相川・河内・西・東・深造という5つの組から構成され、集落を流れる相川に沿って疎塊村の形態をとっている。これらの組は吉沢集落を構成する小集落であり、1～2kmの間隔を置いて分布する。

2010年時点での高齢化率は75.0%、平均世帯人員は1.7人で、高齢化と世帯の小規模化が進んでいる。表1から、集落構成世帯の概要を確認する。各組とも5世帯以下で、70～80歳代の高齢者を中心に単身世帯あるいは夫婦世帯で構成されている。相川・河内・西・東の各組には、

表1 佐久間町吉沢集落構成世帯の概要

組	世帯番号	世帯人員	第1世代		第2世代		老親が最もよく交流している 別居子の所在地	訪問/来訪 の有無	乗用車 の保有
			男性	女性	男性	女性			
相川組	1	3人	80 (農業)	78 (無)	46 (農業)		同居		有
	2	1人		80 (無)			長男: 旧浜松市 (週1回程度)	来訪	無
河内組	3	1人		84 (無)			長男: 旧浜松市 (週1回程度)	来訪	無
	4	1人		80 (農業)			長男: 旧静岡市 (年3回程度)	来訪	無
	5	2人	88 (無)	86 (無)			長女: 東栄町 (週1回以上)	来訪	無
	6	4人	81 (自営)	76 (自営)	50 (自営)	47 (自営)	同居		有
	7	2人	65 (農)	61 (主婦)			長男: 豊橋市 (週1回程度)	訪問	有
	8	1人		78 (無)			長男: 浜北市 (週1回程度)	訪問	有
西組	9	1人		88 (無)			長女: 浜北市 (週1回程度)	来訪	無
	10	4人		89 (無)			同居		
			81 (無)	76 (主婦)	40 (無)				有
	11	3人	80 (農業)	75 (主婦)			長男: 旧浜松市 (毎日)	来訪	有
	12	2人	84 (無)	80 (主婦)			長女: 豊川市 (週1回以上)	訪問	有
東組	13	3人	90 (無)	84 (農業)	50 (農業)		同居		有
	14	1人	80 (農業)				長男: 磐田市 (年数回)	訪問	有
	15	1人		81 (無)			長男: 旧浜北市 (週1回程度)	来訪	無
	16	1人		81 (無)			長女: 豊川市 (週1回以上)	訪問	無
深造組	17	1人	62 (陶芸家)						有
	18	1人	65 (無)						有

(資料) 聞き取り調査 (2011年8月実施)

第2世代に該当する同居子のいる世帯も存在する。そして、最もよく通う別居子の所在地をみると、旧浜松市と旧浜北市が3人で最も多く、愛知県豊川市2人、静岡市や愛知県豊橋市、同東栄町、磐田市が各1人などとなっている。別居子の老親宅への「来訪」頻度は週1回程度が最も多く、場合によっては老親から別居子宅へ「訪問」している。乗用車の保有状況をみると、保有しない世帯が7、保有する世帯が11あった。保有しない世帯はいずれも女性高齢者の単身世帯であることが多く、性差による移動の制約が存在していることがわかる。

次に、村落社会の活動状況を確認しておく。自治会の寄り合いとしての組長会は2ヵ月に1回開催されている。近年は、自治会費が合併により年間32.8万円から8万円にまで削減されるなど、施設管理経費の捻出が課題となっている。農作業における労力交換は組が基本単位となっているが、農作業に耐えうる住民が出役して田植と稲刈りを手伝っている。氏神として八坂神社があり、8月25日の祭礼と元日の初詣のみ神事が執り行われている。社殿の補修の際には入会林の材木の売却益250万円を費用に充て、管理を継続している。そして、高齢集落において重要なのが葬式組である。組ごとに組織されており、葬儀の際は担い手の高齢化ゆえに別居子が帰省して老親に代わって運営している場合が多い。特筆されるのは、別居子には葬儀に関する知識や経験が少ないため、予め葬儀の運営に関するマニュアルが作成されている点である。講集団は庚申講・秋葉講などが存在するが、トウヤ(当家)の輪番制に限界が生じ、2005年頃から休止されている。

(ii) 「つながり」の維持・創出とその機能

「吉沢しゃくなげ会」は、吉沢集落に居住する高齢者が構成員となっている小地域福祉活動組織である。高齢者中心の集落となっているため、17名の会員で構成される同会は実質的に集落活動の中心的担い手となっている。

活動は毎月第2・第4木曜日に行われており、集落中心部にある旧吉沢小学校校舎の教室で

実施されている。昼食をはさんで9時から17時まで、集落の課題を話し合ったり、社会福祉協議会から派遣される講師の講話を聴いたり、レクリエーションや雑談などをして過ごす。会の運営には、愛知県豊橋市からIターンした世帯番号7（65歳・男性）の会員が重要な役割を果たしており、会場から遠距離にある会員を自動車で送迎したり、昼食の弁当を約8km離れた愛知県東栄町の仕出し店へ受け取りに行くなどしている。昼食時には男性会長（世帯番号11）が味噌汁を振る舞い、参加者はこれを楽しみにしているという³⁾。また年3回（6月・12月・1月）の頻度で、東栄町内の料理店で懇親会を開いている。

その他の活動としては、夏季を中心に「道普請」とよばれる道路や山道の清掃や補修作業を実施したり、月1回の公立佐久間病院からの巡回診療⁴⁾を受け入れるなどしている。特に道普請では、男性会員が大雨で損壊した沢の橋を修理したり山水を引き込む水道管の補修作業をするなど、自己の可能な範囲で対応している。また緊急時のサポートに関しても申し合わせができており、連絡をとるべき別居子の連絡先や対応にあたる集落住民も予め決めている⁵⁾。

このように、高齢者組織の形成と活動が村落社会のつながりを維持あるいは創出しており、それが行政への依存を極力抑えながら集落の力に対応する能力を生みだしていた。しかし、高齢者は加齢による心身の変化に直面する存在であるため、中長期的に現状が維持されるとは考えにくい。現に、葬儀の運営に関しては別居子という集落外のサポート源の支援を受けている例からもそれが窺える。

(3) 「がんばらまいか佐久間」の形成と機能

佐久間町では、2005年に「住民まるごと参加型NPO」をスローガンに掲げた特定非営利活動法人「がんばらまいか佐久間」が設立された。NPO設立に向けた動きが本格化したのは、旧佐久間町と浜松市との合併協定書調印式が終了した2004年12月以降である。これは、佐久間町における政治・行政指導者層によって進められた。

組織の設立は、旧佐久間町が従来担ってきた役割の一部をNPOが担うことを意図している。会員数は2010年時点で1,490世帯、1世帯当たり1,200円を年会費として納入している。図6のように、がんばらまいか佐久間では、理事会、事務局と7つの活動委員会から構成されている。7つの活動委員会は、総務委員会、保健・福祉活動委員会、地域おこし活動委員会、文化・スポーツ・社会教育活動委員会、環境づくり活動委員会、女性活動委員会、世代間交流活動委員会であり、それぞれに活動会員とよばれる会員があわせて約100人所属している。

各委員会でのイベントの実施が中心的活動であるが、特徴的な取り組みとしてデマンド型タクシーと食堂の運営が挙げられる。前者は、NPOタクシー運営委員会の活動会員が

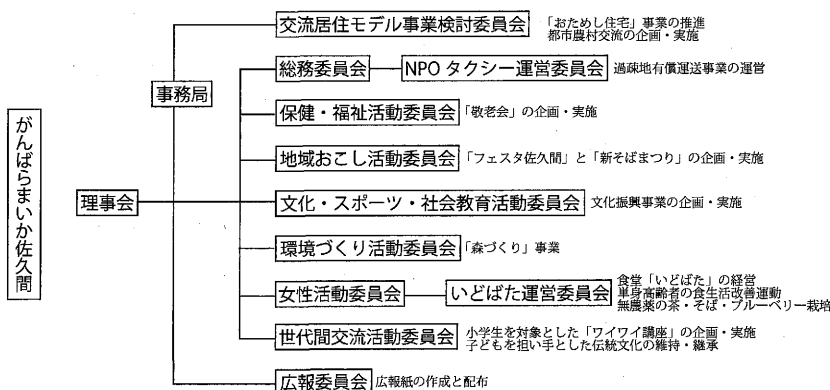


図6 「がんばらまいか佐久間」の組織図

資料：NPO法人「がんばらまいか佐久間」資料

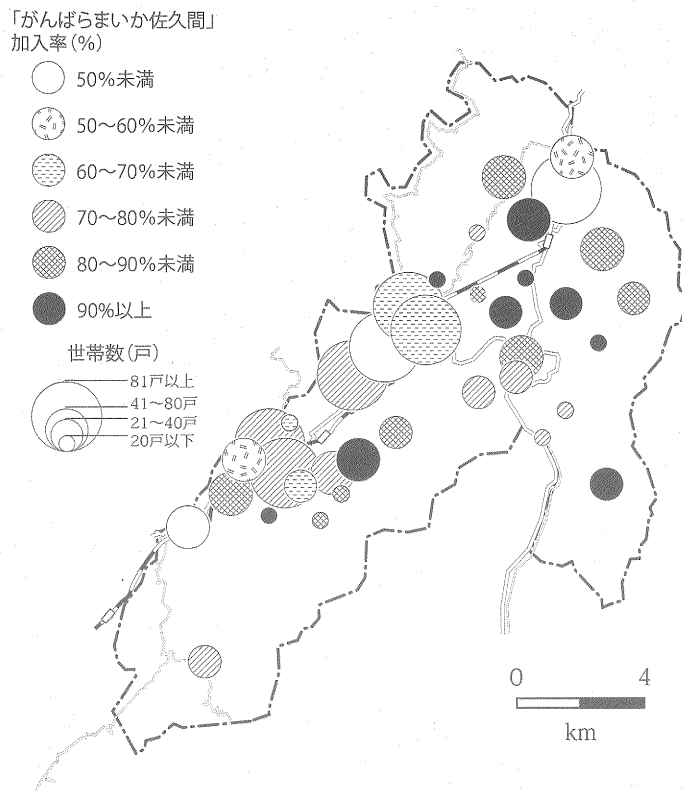


図7 「がんばらまいか佐久間」の集落別加入率

資料：NPO法人「がんばらまいか佐久間」資料

担い手となって2007年に2両のタクシーで活動が始まり、前日までに予約をすればサービスを受けることが可能である。料金は初乗り1.5kmまでが300円で、それ以降2kmごとに500円が加算されるシステムである。2010年度利用実績で、年間6,728件あり、月平均561件となる。一方、後者は旧役場の近所に店舗を2007年に開設し、自家栽培のソバを女性活動委員会が使って商品を提供している。同委員会のメンバーが1日あたり3名、時給500円で6時間従事している。その他、食堂では農産物加工品等の販売と、町内在住の単身高齢者を招待して食事会を開くなどしている。タクシーや食堂の運営に関しては、地域住民たる活動会員に対して雇用を創出するという意義も見出せる。

ところで、がんばらまいか佐久間への加入率(図7)をみると、縁辺集落を中心に加入率が高くなっていることがわかる。反対に加入率が低いのは、幹線道路に面した世帯数の大きな集落である。これらの集落は、各種施設へのアクセスが比較的容易である。がんばらまいか佐久間の福祉的活動は今のところタクシー事業にとどまるが、移動手段の確保という面で加入している世帯が多いものと推測される。また、縁辺集落では自己の集落で対応が立ち行かなくなった場合を想定して、「安心感」を得るために加入が進んでいるとも解釈できる。小規模・高齢化の進む集落において、現在は個人や地域社会による対応が可能であってもいずれそれが困難になり、より大きな地域組織による新たな対応を期待していると考えられる。

6. おわりに

本稿は、地域的社会的関係の総体を「つながり」とよび、そのつながりの維持や創出を目指した取り組みの機能と意義を、過疎山村であり被合併山村でもある浜松市佐久間町の事例から明らかにした。

過疎山村では高齢者の生活問題が深刻化しており、集落の限界化も加わって、村落社会が伝統的に維持してきた地域的社会的関係の弱体化が懸念されている。この地域的社会的関係は、高齢者の生活を支えるサポートの授受の基盤となるものである。たとえ高齢者にサポートを付与せずとも、サポート源になりうる地域的社会的関係の創出が現代の過疎山村に求められている課題である。とりわけ、機能剥奪が進む被合併山村においては重要な問題となっている。

対象地域である浜松市佐久間町では、集落の小規模・高齢化が著しく進み、集落での社会関

係が希薄化していることが想定される。こうした変化を受けて佐久間地区社会福祉協議会では、集落における社会関係を維持あるいは創出するために「サロン活動」とよばれる小地域福祉活動を展開し、事例の吉沢集落では既存の村落社会関係がサロン活動に代替・再構築され、社会関係の強化が図られていた。しかし、高齢者は加齢による心身の変化に直面する存在であるため、中長期的な現状の維持が課題となっている。佐久間町では、浜松市との合併後に旧町域規模で地域ガバナンスを担うNPO組織が形成されており、その活動の展開に期待が寄せられている。NPO加入の地域差をみると、小規模・高齢化の進む縁辺集落で加入率が高くなっており、自己の集落で対応が立ち行かなくなった場合を想定して「安心感」を得るために加入が進んでいると考えられる。

浜松市佐久間町では、集落レベルや町域レベルで助け合いの構造がみられた。いつかは自分もお世話になるという互酬的意識があるものと思われ、地域社会に「つながり」が成り立っていることが背景にあると考えられる。鳥越（2008）では、他者が困っている際に支援を与えるという行動について、短期の見返りは求めないが、いつかは自分のところに利益が戻ってくると期待しているという。本稿では、「つながり」としての地域的社会関係がそもそも構築される地域的基盤にまで考察が及ばなかった。この点は今後の課題である。

注

- 1) 総務省（2011）によれば、2012年時点で高齢化率が50%以上の集落は、全国の過疎地域64,954集落中9,516集落（全体比14.7%）にのぼる。これらの集落では地域活動を単独で維持することは困難とされ、このうち今後10年以内に消滅する集落は中四国地方と東北地方を中心に454集落、いずれ消滅すると長期的に予測される集落は2,342集落にのぼるとされている。このうち、静岡県を含む中部地方は中四国地方と東北地方に次いで多く、前者に含まれるのは50集落、後者は265集落に達する。
- 2) 限界集落に関しては中條（2011）で問題を整理しているので、参照されたい。
- 3) 会の運営に必要な経費（公共料金やお茶代等）は年12,000円の年会費から支出されているが、弁当代は別途500円集められている。高齢者にとって、月2回出席すれば弁当代は1,000円となり、会費を合わせると月に2,000円の支出となるが、特に不満を申し立てる人はないという。
- 4) 公立佐久間病院の巡回診療には同病院に勤務する研修医が参加し、過疎地域医療に関する研修を重ねているという。
- 5) 対応にあたる集落住民は、乗用車を保有する人が担当している。

文献

- 岡橋秀典（2004）：過疎山村の変貌。中俣 均編『国土空間と地域社会』朝倉書店，pp.110-136。
- 総務省（2011）：『過疎地域等における集落の状況に関する現状把握調査結果』総務省地域力創造グループ過疎対策室。
- 鳥越皓之（2008）：『サザエさんのコミュニティの法則』NHK出版。
- 中條曉仁（2003）：過疎山村における高齢者の生活維持メカニズム－島根県石見町を事例として－。地理学評論，76，pp.979-1000。
- 中條曉仁（2007）：中山間地域における高齢者のサポートネットワークと地域住民の福祉活動。

地理科学, 62, pp.79-92.

中條暁仁 (2011): 静岡市中山間地域における集落の存続と「限界化」. 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会・自然科学篇), 61, pp.65-78.

町村敬志編 (2006): 『開発の時間 開発の空間－佐久間ダムと地域社会の半世紀－』 東京大学出版会.

付記

現地調査にあたっては、浜松市天竜区佐久間町の田高良治氏, NPO 法人がんばらまいか佐久間の河村秀昭氏, 佐久間地区社会福祉協議会の永井紀子氏に多大なるご協力とご教示をいただきました。記して御礼を申し上げます。

なお, 本稿の内容は, 2011年度日本村落研究学会東海・関西・中四国地区研究会ならびに2011年度日本地理学会秋季学術大会「少子高齢化と地域問題」研究会において報告した。